

# 第十四回

## マリンの奇襲

われわれの寢床はバナナの枯れ葉を沢山集めて葉の芯をとり、積み上げた葉がこぼれないように四隅へ太い枝で囲って作った。そこへ子ねずみのように枯葉の中へ潜り込んで寝た。

これはマリリヤの蚊を防ぎ、体を保温するためには最適な方法だった。

トカゲがわれわれの食ひ散らかしたものをねらうて夜になるとガサガサやってきた。眠りにつくころ、今度はトカゲがばかにうるさいなとぶと葉の間から顔を出すと、迷彩服に鉄兜のマリン、米兵の陸戦隊員が、薄暗くなったジャングルを掻き分けてこちらへやってくるのが見えた。

この時も、われわれには下駄が役立つてジャングルのなかを足を痛めず、すわ一大事とばかり、一目散に海岸線へ二手に別れて逃げた。女椰子よりはずっと低い、男椰子の上へはいあがり、じっと息をこらしていた。

マリンたちは私が入っているのも気付かず、椰子の下をゆっくりゆっくり通り過ぎ、海岸線にでる手前で

「出ひんごー」

というよつな英語で怒鳴ってから、ダダダダと自動小銃を発射した。どこからともなく十四、五人のマリンが集まり、上陸用舟艇を呼び、帰っていった。わたしは裸なのであちこち傷をしたが、二人ともまずは難を逃れることができた。

後で分かったことだが、椰子の木は現地人の財産で、酋長がお祝いことでもないかぎり切り倒すことはなく、現地人は絶対にやらないことだった。しかも切り倒し、ほったらかしたまま、さては日本兵の仕業と、現地人が米兵に注進におよんだということのようだった。

二度目の襲撃の時は、こちらからの気づき方が遅れて、飛び出して逃げれば確実に撃たれるとおもい、近くの椰子の木が二本密集して生えている、三角地帯のごと真中に慌てて逃げ込んで、椰子の枯葉を被って身をこぼめた。こぼれたマリリンに踏みつけられることはないと思ったのだ……。

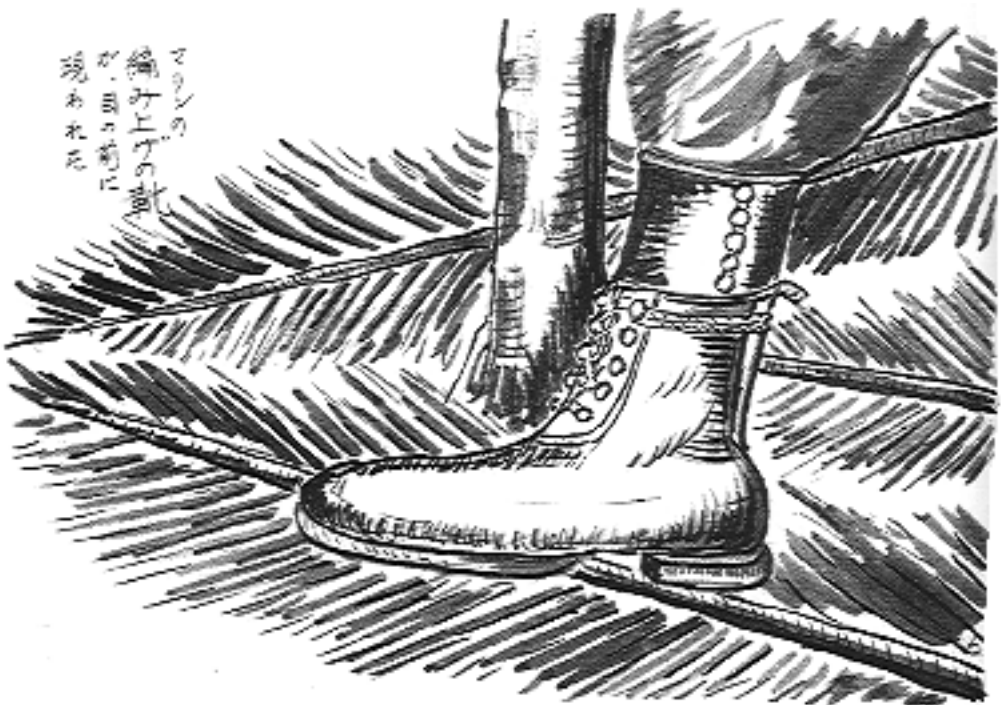


「夜、椰子は毒、若い  
シヤンゲル、マ夫、ミを椰子の  
枯葉の下にそぐり込み  
辛うじて、命をのがれる。」

ところが椰子の枯葉の裏には蟻の巣があったのだ。蟻は私の目といわず、耳といわず、こゝろがまわす体中に食いついてきた。が、命がけで我慢しく頑張るしかなかった。  
マフンたちはこの時、シヤンゲルが暗くなっているにまかかわらず、懐中電灯を持たずに歩いてきたのがわわわわわわとては幸運だった。

動物狩りでもするようになり、数人が横一列に並び、仲間に誤射されないため右から順にワンツウ、スリー、と番号を掛け合いながら、われわれを海岸へ追いだす作戦らしく、草むらをガサガサさせてやってきた。

わたしのところへは、ナイト、ナインとした二人が挟むように迫ってきた。迷彩服を着たマリンの牛の裏皮を使った編み上げの靴が目の前に現れた時には、嫌に食いつかれている目をぎゅっ、とつぶり、心の中で念仏を唱えた。



マリンの  
靴が、  
目の  
前に  
現れた  
時、  
嫌に  
食いつ  
か  
れて  
いる